

「頭」を含む怒りを表す動詞句の 意味の成り立ちをめぐる考察^{*1}

愛知県立大学非常勤講師 馬場 典子

1. 本稿の目的

怒りを表す動詞句のうち、特に「頭」という身体部位語を含む動詞句の意味の成り立ちについて考察することを目的とする。具体的には「頭から湯気を立てる」「頭に血が上る」「頭に来る」の3つの動詞句を取り上げる。

具体的な分析に入る前に、本稿で使用する諸概念について確認しておく。それは、多義語（「多義語」とは、「同一の音形に、意味的に何らかの関連を持つ二つ以上の意味が結びついている語」（国広(1982:97)）である。）分析において必要となる、比喩の下位分類である「メタファー・シネクドキー・メトニミー」の概念である。

1.1. 分析の前に

1.1.1. 比喩の下位分類ーメタファー・シネクドキー・メトニミー^{*2}ー

梶山(1997:31)は隠喩(メタファー)ーの定義を以下のように述べている。

隠喩(メタファー):二つの事物・概念の何らかの類似性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喩。(下線および括弧内は引用者)

メタファーにおいて一番重要な言葉は、下線部の「類似性」である。(この「類似性」について梶山・深田(2003)は「類似性に基づく」というのは、2つの事物・概念に類似性が内在しているというよりも、人間が2つの対象の間に主体的に類似性を見出すことを表していると考えたほうが適切である。」(p.76、下線は引用者)と述べている。)メタファーに基づく表現としてよく知られるものに、「月見うどん」がある。これは我々(日本人)が、「月が丸く黄色い」と「卵が丸く黄色い」こととの間に「類似性」を見出したことを表すものであり、本来の「月」の意味が拡張してい

^{*1} 同テーマで、第10回日本認知言語学会(2009年9月27日(日)於:京都大学吉田キャンパス)で発表予定であったが、一身上の都合により辞退。よって未発表論文である。なお、本稿は拙論(2009)(未公開)の第5章を加筆・修正したものである。

また、愛知県立大学高等教育研究所第9回言語教育研究会にて発表の際、同大学の熊谷吉治先生、東弘子先生に貴重なコメントを賜った。深く感謝申し上げます。

^{*2} 「メタファー・シネクドキー・メトニミー」にほぼ対応する日本語として「隠喩・提喩・換喩」があるが、本稿では「メタファー・シネクドキー・メトニミー」という用語を採用する。

る。

次にシネクドキーは靱山(1997:31)によって次のように定義されている。

提喩(シネクドキー)^{*3}:より一般的な意味を持つ形式を用いて、より特殊な意味を表す。あるいは逆により特殊な意味を持つ形式を用いて、より一般的な意味を表すという比喩。(下線および括弧内は引用者)

シネクドキーにおけるキーワードは、「一般」と「特殊」である。この関係は「類」と「種」とも言い換えられる。シネクドキーに基づく例でよく知られたものに、「花見」や「酒飲み」がある。まず「花見」の「花」は<サクラ>を指す。つまり、「花」という「一般」的な言葉で、その下位分類である数多くの花の「(一つの)種」である<サクラ>を表している。また「酒飲み」の「酒」は、「アルコール(飲料)」一般を指す。「アルコール(飲料)」には、(日本)酒の他にもビール・ワインなど様々な種類があるが、それを「酒」という「種」で表している。これは「花見」と逆の例である。

メトミー(換喩)については、靱山(1997:31)は以下のように定義している。

換喩(メトミー):二つの事物の外界における隣接性、あるいは二つの事物・概念の思考内、概念上の関連性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喩。(下線および括弧内は引用者)

メトミーにおいて大切なのは「隣接性」と「関連性」であるが、本稿の分析でとりわけ重要なのが「隣接性」である。よってここでは「隣接性」についてやや詳しく紹介する。

「隣接性」はさらに「空間的隣接性」と「時間的隣接性^{*4}」に分けられる。「空間的隣接性」を表す例としては、「一升瓶を飲み干す」や「赤ずきん」が挙げられる。「一升瓶を飲み干す」は、「一升瓶」という「容器」で、そこに隣接する「内容物」である「酒」を表している。また「赤ずきん」は、「赤いずきん」という被服で、「それをかぶった(それと接触している)女の子」を表している。このように空間的隣接性とは、「ものともとの物理的な接触または近接を特徴とする」(瀬戸(1997:176))。また「時間的隣接性」は、「事態」を表す動詞句を分析する本稿においてとりわけ重要である。瀬戸(1997)は、「時間的隣接とは、モノと見なされたある事態が同じくモノと見なされた他の事態と時間軸上で、「隣接」している、ということである。(中略)時間概念が空間概念を通して現れるというのは、ごく一般的な現象である。ということは、空間的な「もの」も、時間的な「事態(出来事、コト)」も、抽象的な「特性」も、いずれもことばによる認識の上では、「もの」

^{*3} シネクドキーの範疇に何を含めるかという点については、山梨(1988)のように「類-種」関係と「全体-部分」を含めるとする説もあるが、本稿は、シネクドキーの範疇をより厳密に特定した靱山の定義に従い、「類-種」関係のみとする。なお、後に紹介する瀬戸(1997)も、シネクドキーの定義については靱山と同様の立場である。「全体-部分」関係に関する詳しい議論は瀬戸(1997:106-114)を参照。

^{*4} メトミーの下位分類として、「原因-結果」または「結果-原因」のメトミーがあるが、本稿では、瀬戸(1997)の「因果関係は、時間的前後関係が特化されたもの」(p.150)という考えに基づき、「原因-結果」および「結果-原因」のメトミーを時間的隣接関係として記述する。しかし、「原因-結果」および「結果-原因」の因果関係が極めて強く、その関係を特筆すべき場合はこの限りではない。

(空間的な「もの」をプロトタイプとする)として振舞う。メトニミーとは、世界のなかでの「モノ」と「モノ」をベースとする指示の横すべり現象である。」(pp.176-177)と述べている。この「意味の横すべり」とは「一方から他方へ指示がずれること」である。この「時間的隣接」を表す例に「お手洗い」がある。これは、<用を足す>という行為と、その後に行く<手を洗う>という行為が時間軸上で隣接していることに基づき、字義通りには<手を洗う>という<用を足す>後の行為で前の行為を表している例である。

さて、本稿の動詞句の分析においては、当該の動詞句の中に複数の意味特徴が存在する。その意味特徴が別義として抽出される際、ある別義の認定においては取り立てて特徴的ではなかった意味が、別の別義の認定においては特に際だったものとなることがある。その場合、その意味特徴は「焦点化」されていることになる。このような場合、元の意味と別の焦点化された意味の間には「焦点移動によるメトニミー」が成立していることになる。この「焦点移動」に関しては、西村(2002)が「現在進行中の換喩に基づく意味拡張の例」(p.289)として、動詞「しみる」を挙げ、以下のように述べている。

(1) a. 冷たい水が歯に／煙が目にしみる。

b. 歯／目がしみる。(西村(2002:289)例文(24))

動詞「しみる」の本来の用法はaであると思われるが、近年(コマーシャルなどの影響もあって)bの用法も市民権を獲得しつつある。液体や気体の身体内部への特定の様態での移動をプロフィール^{*5}するaに対して、bでは、そのような液体の移動の結果身体部分に生じる不快感に焦点が移っていると考えられる(「歯／目が痛む／痛い」のように、一般に身体部分はそのに生じる感覚を表す表現の主語になりうることに注意)。二つの用法における「しみる」のプロファイル間には、原因・結果という換喩的な関係が成立していることになる。(pp.289-290、下線は引用者による、括弧内は原文のまま)

西村の挙げた例のように、「焦点が移動する」ということは、「ある事態から別の事態へ指示対象がずれる」ことに他ならない。よって本稿でも、西村の示した「焦点の移動」を使用することになる。

2. 分析

考察対象の3つの動詞句には、それぞれ生理現象を表す実例が存在する(ただし、「頭に来

*5 「プロフィール」という概念については、靱山(2002)が、「ベース(あるいは「スコープ」)」という概念との対比を用いて、次のように説明している。靱山は、語の意味を適切に捉えるためには、その語に関係する概念領域のある一部分が重要であるとして、例に「昨日」という語を挙げている。

「昨日」という語の意味を記述するには、「時間」という概念領域の観点から捉える必要があるが、この語の意味に「時間」のすべて(現在・過去・未来)が直接関わっているのではない。なぜなら、「昨日」という語の意味は、概ね<発話時点を含む日の前の日>とであり、直接関係するのは、「発話時点を含む日」と「その前の日」という「二日間」であるからである。このような、語の意味の記述に必要な概念領域の一部分を「ベース」あるいは「スコープ」という。また、「昨日」という語は、上記のベースの中で、「発話時点を含む日」ではなく、「前の日」を指しているが、このようにベースの中で、ある語の意味が直接指示する部分を「プロフィール」という。(p.52より引用者が一部改変、下線部は引用者による)

る」については「～が頭に来る」の形で用いられる)。よって、この3つの動詞句は、生理現象から怒りへの転用によって理解されていると考え、考察を行った。

2.1. 「頭から湯気を立てる」

では怒りの表現としての「頭から湯気を立てる」を見る前に、まず生理現象としての「頭から湯気を立てる」を見ていく。以下の例を見てみよう。

(2) こんな遊びをよくしてもらった。“人間ハンマー投げ”と言ってハンマー投げの要領でドングリ君(引用者注;「年上の者」のこと)が俺たちを氷の上に放り出してくれる遊びだ。まず氷の上に滑り止め用の雪を積み上げ(これがハンマー投げのサークルだと思えばいい)それを中心として“ハンマー投げの選手”の真似をしたドングリ君が一人一人腕をとって氷の上を回転させ反動が付いた所で腕を放してくれるのだ。もちろんまともに滑れる者はまれでほとんどの者がひっくり返って腹とか背中で滑っていく…実にワイルドな遊びだ。

それがおもしろい♪背中やお腹に氷のかけらや雪が入って寒いはずなのに何べんも何べんもおねだりする俺たち…汗びっしょりで頭から湯気を立てながらも切がいい所まで投げ続けてくれるドングリ君…“長靴スケート場”にいつまでも俺たちの歓声がこだましていた。(http://homepage1.nifty.com/torio/shiyhonanjidai/shiyhonan09.html)

(2)の例は寒いところで運動した後、汗で濡れた頭髮から蒸気が立ち上っているさまを表現したものである。汗をびっしょりかくほどの運動量であるから、体温の上昇、顔の赤らみ、心拍数の増加などの生理的変化がある。では次の例を見てみよう。

(3) 風呂から上がった進藤が頭から湯気を立てながらボクの肩越しに盤面を覗いている。「ああ、そうだよ」そう言って進藤を見やると…進藤は下半身にタオル一枚巻いたままの姿だった。(http://www.geocities.jp/emimishirokuro/touyaakiranokenkyu4.html)

(3)の例は温かい湯につかることで体温が上昇し、(おそらく)洗髪して濡れた髪の毛から蒸気が上がっていることを指して「頭から湯気を立てる」と表現している。この例の場合、「下半身にタオル一枚巻いたままの姿」というところから、男性は風呂上がりで、頭だけではなく体全体が上気していることが推測される。先に見た(2)の例も実際は体全体が上気しているはずだが、戸外で服を着用しているため、「頭」だけが湯気を立てているように見えていると思われる。

このように、体全体が上気しているさまを、「頭」に限定して表現しているのは、やはり人が人を見るとき、頭が身体が一番上部にあり、なおかつ一番目立つ部位であるからだと思われる。そして、頭から立ち上る湯気が、外部から最も観察しやすいからだと考えられる。このことから、生理現象としての「頭から湯気を立てる」は、「部分—全体」関係のメトニミーに動機づけられていると言える。また、顔の赤らみも同時に生じている可能性は高いと考えられる。なぜなら、入浴すれば顔は上気して赤くなり、運動しても体温の上昇により赤くなるからである。このように、生理現象としての「頭から湯気を立てる」を見てくると、重要なのは「体温の上昇」であることがわかる。体温の上昇とは、すなわち「熱を帯びること」である。そして、この「熱を帯びた状態」が、

「湯気が立ち上る」という現象となって現れ、最も顕著な変化として外部から観察可能になっていると考えられる。

では次に怒りとしての「頭から湯気を立てる」の例を見てみよう。

- (4) 太平洋戦争開戦初日、フィリピン攻撃の先行偵察、戦果確認を行った綾乃孝治、峰宣之ペアの駆る百式司令部偵察機、通称ブラックバードは帰路、ロッキードP38 ライトニング戦闘機の追撃を受けた。からくも逃げ延びたものの、台東に帰投し、着陸に失敗したのである。

もともと百偵は着陸の容易な機体ではない。それが無数の銃弾を受けており、満身創痍ともなると、失速速度も上がり、着陸は格段に困難になる。峰はだましまし百偵を着陸コースに乗せ、できるだけ静かにタイヤを接地させた。(中略)

着陸に失敗したブラックバードは火災を起こした。時速一四〇キロで地面とこすりつけられたのである。膨大な摩擦熱が発生する。ガソリンに引火してしかるべきである。火災発生に気づいた綾乃はこんな所に戻ってきてまで、焼け死ぬのはたまらないとすたこら逃げ出したのである。しかも、せっかく撮影した乾板を放り出して。劔持少佐は怒りで言葉を詰まらせながらも、これ以上、綾乃を怒鳴りつけるわけにも行かず、頭から湯気を立てている。

峰は自分が着陸に失敗したのを叱られていると勘違いしてしゅんとしているが、峰には一片の責任もない。そもそも、あれだけ痛めつけられた機体で曲がりなりにも降りてこられたのだから、それだけで上々の出来である。「俺の部屋に來い。報告を聞かせてもらおう」劔持少佐は顔を真っ赤にさせたまま、後ろを向いて行ってしまった。

(<http://www.din.or.jp/~aoyama/soukyu2.html>)

(4)の少佐は、「怒りで言葉を詰まらせる」というところから、冷静に言葉で相手を諭すことができずにいることが読み取れる。また怒りで「顔を真っ赤にさせ」ていることから、怒りの程度の高さが感じられる。このように(4)の例からは、「頭から湯気を立てる」を用いた場合、怒りの程度の高さが外部から観察可能なものであるということがわかる。では次の例はどうであろうか。

- (5) 再び控室。

私は名護に訊ねた。

――7ラウンド、最大の好機で、なぜ攻撃を躊躇したのか？

視線を床に落としたまま、名護はポツリと呟いた。

「距離がつかめなかった。逆にカウンターをとられる気がして……」(中略)

――カウンターを恐れるのはわかります。しかし、チャレンジャーがベルトを獲ろうと思えば、どこかでリスクを冒す必要がある。残念ながら、そういうシーンが見られなかった。「自分の中にピーンとくるものがなかった。相手に対して、特に強いなァという印象はなかったのですが……」ではセコンドの指示は、どういうものだったのか？

頭から湯気を立てながら具志堅は言った。

「7ラウンド？ 当然“行け！”と言いましたよ。手を出せば当たるんだから。それが証拠に6ラウンド、左を出したら倒したじゃない。なぜ行かないのか、私にだってわからない

よ。見ているお客さんが一番イライラしたんじゃないの」

(<http://www.ninomiya-sports.com/xoops/modules/news/backnumber/boxer/bn/b021010.html>)

(5)の、具志堅氏の語気を強めた発言からは、攻撃を躊躇したボクシング選手に、「攻撃すれば相手を倒せたのになぜ攻撃しなかったのか」という苛立ちと興奮がうかがえる。以上の2つの例から、「頭から湯気を立てる」が怒りの表現として用いられた場合、かなりの苛立ちと興奮を伴い、それが外部から観察可能なタイプの怒りを表すことがわかる。次に示すのは、その「外部から観察可能」という性格を顕著に示す例である。

(6) 仁王立ちに突立った槍持奴は、槍の鞘にひっかかった煙草入を取ろうともしないで、そのまま大地に突き立てて、頭から湯気を立ててこの家の二階を睨（にら）み上げています。さしも騒がしかったこの店が、その時に水を打ったように静かになりました。

(http://www.aozora.gr.jp/cards/000283/files/4505_7601.html)

(6)の例は、具体的な言動はなく、態度だけで怒りを表している。槍持奴は仁王立ちで槍を大地に突き立て、家の二階を睨みあげているが、このとき槍持奴は一言も発していない。しかし、騒がしかった店の中がしんとなくなってしまうほど、その見上げるさまがすさまじかったと想像できる。その形相全体を表して、「頭から湯気を立てる」と言っているのであるから、顔はおそらく怒りで真っ赤になり、目をむき、身体を硬直させていたと推測できる。このように、言葉を発せず、態度だけで相当程度の高い怒りを表すことができるということは、すなわち、「頭から湯気を立てる」が、外部から観察可能な表現形式であることを示している。

以上の例から、怒りとしての「頭から湯気を立てる」は、「言葉をつまらせる」「語気を強める」「(ものすごい形相で)睨みあげる」という様子を表しており、興奮を伴った程度の高い怒りを感じ取ることができる。また、生理現象のときと同様、心拍数の増加や顔の赤らみが起こっており、「体が熱を帯びている」状態になっていると考えられる。

それでは次に、「頭から湯気を立てる」がなぜ怒りの表現として理解されるのか、そのプロセスを考えてみよう。

生理現象としての「頭から湯気を立てる」は、<寒い戸外での運動や入浴という外部要因によって体温が上昇し、上気した体の一部である頭から湯気が立ち上るさま>を表していた。そして「体温の上昇(熱を帯びること)」が重要であった。

これに対し、怒りとしての「頭から湯気を立てる」の場合は、まず「怒りという抽象的な感情」が原因となっている。つまり「運動や入浴」という具体的な要因から、「怒り」という抽象的な要因になっている。また、怒りとしての「頭から湯気を立てる」においては、もはや湯気は外部から観察可能ではなくなっているが、顔の色や表情で怒りの程度の高さが理解されるようになっていく。つまり、生理現象においては背景の一部にすぎなかった「顔の赤らみ」が、怒りにおいては顕著な特徴として認識されるわけである。

また、怒りの場合は、実例の「言葉をつまらせる」「語気を強める」「(ものすごい形相で)睨みあげる」という様子から、かなりの興奮を伴った状態であることが理解できる。そして、生理現象においては、「運動や入浴によって心拍が激しくなり、血流も増加することから体温の上昇につ

ながる」ことは、そのまま怒りにおいても、「怒りという原因によって心拍が激しくなり血流が増加することで体温が上昇することにつながる」として保持されている。つまり、怒りによって心拍数の増加や顔の赤らみ、体温の上昇などが引き起こされると考えられることから、「原因－結果のメニミー(または同時性に基づくメニミー)」によって動機づけられていると言える。また、生理現象において観察された「湯気(を立てる)」という現象は、怒りでは観察されないが、それが怒りの表現に用いられているのは「誇張表現」だと考えられる。「誇張」とは、「ただものごとを、適切と思われる程度をはるかに越えたことばで表現することである」(佐藤(1992=1986)p.225)。つまり、現実には湯気は観察されなくとも、「感情主の怒りの程度がいかにも高く、いかにも興奮を伴うものか」を誇大に表現する目的で、湯気が立ち上るさまをそのまま怒りの表現に転用したと考えられる。

2.2. 「頭に血が上る」

「頭に血が上る」は、「頭に血が集中する」という体内における具体的な生理変化が、怒りの表現にそのまま使用されている表現形式である。これは「頭から湯気を立てる」にはない特徴である。「頭に血が上る」については、田中(2003)が以下のように述べている。

さすがのディアもそれを聞いて頭に血が上った。／「あなた、いい加減なことをいわないでください(略)」(田中(2003:121) 例文(29))

ここで上昇するのは血液であって怒りではない。(中略)この表現もまた、怒りが身体部分・頭に及ぼす生理的影響を通じて怒りを表している。ただしその影響の具体的内容が血液の集中として明示されている点(「頭に来る」と)相違している。

(p.121、括弧内および下線部は引用者による補足)

田中の、「怒りが身体部分・頭に及ぼす生理的影響を通じて怒りを表している」という指摘は妥当であるが、やはり「頭から湯気を立てる」と同様、「頭に血が上る」も、怒りとしての表現のみが存在するのではなく、純粋な生理現象としての表現を先に検討すべきである。

ではまず生理現象としての「頭に血が上る」の例を見てみよう。

(7) (自殺しようとして木に帯をかけ、頸を入れてみていた) その時かさかさとし落ち葉を踏んで歩く人の足音が聞こえて来た。これはいけないと頸を引っ込めようとしたとたんに、穿(は)いていた下駄がひっくり返ってしまった。「しまった」さすがに仰天して小さく叫んだ。ぐぐッと帯が頸部に食い込んで来た。呼吸もできない。頭に血が上ってガーンと鳴り出した。死ぬ、死ぬ。無我夢中で足を藻搔(もが)いた。と、こつり下駄が足先に触れた。「ああびっくりした」ようやくゆるんだ帯から首をはずしてほっとしたが、腋(わき)の下や背筋には冷たい汗が出てどきんどきんと心臓が激しかった。

(<http://www.aozora.gr.jp/cards/000997/files/398.html>)

(8) 時々座って安静にしている時(テレビを見たりしているなど)に突然頭に血が上ってくる感じに襲われます。子供の頃逆立ちをして、頭に血が上り鼻がツーンと来る感じですが、特に血圧が高いと言うわけではないのですが、放置しておいてもいい症状なのでしょう

か？ (<http://kikitai.teacup.com/kotaeru.php3?q=2647818>)

(9) (実例の筆者が海外で購入した痩せる薬を飲んで)「成人男性ならば一日二回、一回2錠・・・」結局、そう自分に言い聞かせ「やせる薬」を飲んでみることにした。初めての服用、飲んでからしばらく後に、全身が熱くなり心臓がドキドキしてくる、頭に血が上ったような感じがして「もしかして効いているのか？」と勘違いする。しかし、この薬のおかげで体重が減ったかどうかは不明。(中略)服用一週間、飲むたびに頭に血が上りぼうっとすることが多くなる。体は火照った感じというより「だるい」という感覚、日に日に体調は悪くなっていくばかり。

(中略)しばらく後の病院の定期検診にてその日も朝2錠を服用後、月一回の病院検診へ出かける。結果は・・・

頭に血が上ったような感じ⇒薬による血圧の急上昇

全身のほてり・ドキドキ感⇒薬による過度な心臓負担による動悸

「絶対にその薬は飲むな、捨てる！」と医者からみっちり説教される。

(<http://homepage1.nifty.com/asoking/yasekusuri.html>)

(7)の例は、首をくぐることによって血液の流れが止められ、頭部に血液が集中し、頭部内の血圧が急激に上昇した状態を示している。また首をくぐることで顔も赤くなっていると思われる。

(8)の例は、逆立ちによって通常足にかかる重力が頭部にかかり、そのことによって、いつもとは違う血の流れが頭部に起きるような症状が、坐っているときにも起こることを示している。逆立ちをすれば重力によって頭部に血液が集中し、血圧の上昇もあると思われる。また頭部への血液の集中によって、頭部以外の「鼻がツーンとくる」という生理変化を体感している。(9)の例は、頭に血が上ることによる生理変化をわかりやすく説明している。筆者が海外で購入した、痩せる薬を飲んだ後の生理変化を「頭に血が上る」で表している。度重なる服用によって「頭がぼうっとする」ことが示されており、頭に影響を及ぼしていることがわかる。また薬の服用によって体調の悪化を感じ、検査してもらった結果、頭に血が上ったように感じたのは「血圧の急上昇」だと説明されている。

このように、(7)～(9)では頭部への血液の集中と血圧の上昇といった生理的变化が見られる。そしてその生理変化は不快な症状として受け止められている

以上の例から、生理現象としての「頭に血が上る」は、「(通常量の血液ならば知覚されることはないが)通常よりも多量の血が頭に到達することによってそれを知覚し、不快を感じる」ことであると言える。またそれと同時に、心拍増加、血圧上昇などの生理変化も起きている。「不快感」とは、実例では「頭ががーんとなる」「頭がぼうっとする」などの「生理変化が頭に及ぼす好ましくない状態」のことである。したがって、これらの身体的変化によって「不快感を感じる」という後の事態が焦点化されていると考えられる。これは時間軸に沿った事態の変化であり、生理現象としての「頭に血が上る」は時間的隣接関係のメニミーによって動機づけられていると言える。

では次に怒りとしての「頭に血が上る」の例を見てみよう。

(10) 越谷署は二十五日、生後六カ月の次男を布団の上に投げ付けて重傷を負わせた

として、傷害容疑で越谷市東越谷、無職の母親(25)を逮捕した。調べによると、母親は六月八日午前八時ごろから同日午後四時二十分ごろまでの間に、自宅で次男を布団に投げ付ける暴行を数回にわたって加え、頭の骨を折るなど、約一カ月の重傷を負わせた疑い。調べに対し母親は「次男にミルクを飲ませたら、吐き出したミルクを自分の顔にかけられて頭に血が上った。未熟児で生まれたので、いつ調子が悪くなるのか分らず、気を張っていて、毎日ストレスがたまった状態だった」と話しているという。(http://www.saitama-np.co.jp/news09/26/06x.html)

- (11) 「捨て子のくせに。施設に帰すよ」とげとげしい里母の言葉に頭に血が上った。何度聞かされたら。くすぶり続けた感情が爆発した。「帰せばいいやん。死んでまえ」一九七九年冬、孝さん(仮名)が中学二年生のときのことだった。淡い期待を抱いた里親との生活は五年で終わった。

(http://www.kobe-np.co.jp/rentoku/kurashi/200805kazoku/05.shtml)

(10)の例は、自分の子どもにミルクを吐きかけられて、それまでたまっていた育児のストレスが一気に噴出したことを、「頭に血が上る」で表している。そして子どもを布団に投げつけて重傷を負わせるという行動に移っている。また(11)の例は、何度となく聞かされた里親の心ない言葉に、それまで我慢し続けていた気持ちが噴出したことを、「頭に血が上る」で表しており、里親に暴言を吐いている。この2例を見ると、「頭に血が上る」には、暴力を起こしたり暴言を吐いた相手に対して、ある程度の忍耐があったことが前提となっているように思われる。しかし、次の例は忍耐の末に起こった事態ではない。

- (12) ある日、一人の温泉ファンがひょうたん温泉のスタッフに、こんなクレームをつけてきた。「湯口からお湯がチョロチョロとしか流れていないじゃないか。こんなのは源泉かけ流しじゃない。たまり湯だ」これは「源泉かけ流しの看板に偽りあり」といっているようなものだ。この話をスタッフから聞いた河野社長は、一瞬頭に血が上った。「そういいますけどね、源泉ではドバドバお湯が湧いてるんですよ。それをそのまま入れてもいいんですよ。いいですよ。なんせ 100℃のお湯ですからね。大量かけ流ししたら、お客さん方は皆さん焼け死にますわ」と言いたかった。だが、冷静になって考えてみると、お客様からそういう声が上がっている以上、対策を講じなければならないのではないかと気がわいてきた。第一、「そんなにドバドバ湧いていて、湯口はチョロチョロかよ。余りの湯はどうしてるんだよ？」と突っ込まれたら、「それがねえ、ぜーんぶ裏の川へ捨ててますねん」などと環境省が目を剥きそうな恥ずかしい事実を明らかにせねばならない。(http://www.hyotan-onsen.com/yumetake/nikki/nikki02.html)

(12)の例は、温泉宿の社長が客に言われたことに対し、瞬時的に怒りの感情が沸き起こったことを「頭に血が上った」で表している。また(10)や(11)で見たような、相手に対する忍耐は感じられず、ある客との一回性の事態である。よって、「頭に血が上る」は忍耐の末に何らかの事態が原因で起こる場合にも、瞬間的に起こる場合にも用いられる。また(12)の例は、しばらく時間が経った後に、冷静に考えることができたとされているが、温泉ファンからつけられたクレームを、

スタッフから聞いた直後には、噴出しそうな激しい感情を抱いたことは、例文の内容からも確かである。

ではここで、「頭に血が上る」が怒りの表現として理解されるプロセスについて考えてみたいと思う。

すでに述べた通り、「頭に血が上る」は、「頭に血が集中する」という具体的な生理変化を、そのまま怒りの表現として使用している点の特徴である。この「生理変化(血流の増加、血圧の上昇など)が起こる」ことは、怒りの感情が生起する場合には、「怒りが原因で生理変化が起こる」ということとして理解されている。そしてさらにその生理変化—思考を司る頭に血が集中すること—により、冷静な思考や判断が一瞬できなくなることまでを含意していると考えられる。このように、怒りを表す「頭に血が上る」では、「怒りという原因によって生理変化(結果1)が起こり、冷静な思考や判断が一瞬できなくなる(結果2)さま」を表していると言える。つまり「頭に血が上る」という事態(結果1)で、その原因である「怒り」を表し、さらには頭に血が上った後の事態(結果2)までもを含意していることになる。これら一連の事態は、生理現象としての「頭に血が上る」と同様、時間的隣接関係のメニミーに動機づけられているが、「頭に血が上る」という生理変化(結果)でその生理変化を引き起こす原因である怒りを表しているという点は、「結果—原因」のメニミーであり、因果関係が強く感じられる。

さて、ここまでは「怒り」としての「頭に血が上る」の例を見てきたが、「頭に血が上る」は、怒り以外の原因でも用いることができるという点について触れておきたいと思う。以下の例を見てみよう。

- (13) 「失敗なんて、買ってでも沢山しちゃいなさい」これは、私がまだ新米だった頃、“欽ちゃん”こと萩本欽一さんにかけていただいた、今も忘れられない一言です。(中略)初めての芸能人インタビュー、しかも相手はあの“欽ちゃん”ということで、私はとてもはりきっていました。ついに私にも活躍の場が来たのです。(中略)興奮で頭がぼーっとしたまま、取材が始まりました。最初の挨拶、そして導入。副編はどんどんインタビューを進め、欽ちゃんと2人で盛り上がっています。(中略)私などそこにいないかのように、時間は過ぎて行きます。拍子抜けした私は、いつの間にか聞き役に回っていました。一緒に来なさいというのは、ついて来て黙って見ていなさいということだったのか。これなら、自分は原稿を書かなくてもいいんだな、と勝手に思っていました。すると、副編が突如こう言ったのです。「さあ、わかったね。それじゃ、ここから先は君がやりなさい」「え？ あ、えっと、その、何を」突然のことで、私は慌てふためいてしまいました。「なんだ。聞いてなかったのか?」「いえ、そんなことは」とにかく何か質問をしなくては、頭に血が上って、やみくもに資料をめくりましたが、何もできません。それどころか、焦ったせいで資料を床にぶちまけてしまいました。ますます慌てて、紙類をかき集める私。「何やってるんだ」副編は呆れ返っていました。ところが、欽ちゃんはニコニコ顔。「うん、うん、うん、落ち着いて」。そして、次に出た言葉が、この一言だったのです。「いいのいいの。君ね、失敗なんて(以下略)」

(http://www.tokyonews.co.jp/recruit/message_chiefeditor01.html)

(13)の例は、急にインタビューの続きをやるように上司に言われて焦ってしまい、資料を床にぶ

ちまけてしまっている。つまり、「焦りから血圧上昇などの生理的変化が起こり頭に影響がもたらされ、その結果冷静な判断が下せなくなる」という事態を表している。さらに(14)の例は「恥ずかしさ」と「焦り」が原因となっている。

(14) その日は営業先で重要なプレゼンテーションがあり、上司のお供を言い付かっていた。プレゼンテーション資料の作成も命じられていて、先輩のチェックと助言を受けながら何とか前日夜に完成させ、ほっとして帰宅。当日は出先に直行して、営業先の入っているビルの受付で上司と一緒にうかがう予定だった。

「あ! やばいっ」朝、電車を待つ駅で思わず大声を上げてしまったが、頭に血が上ってきたのは恥ずかしさばかり_[ママ]原因ではなかった。昨夜作ったプレゼンテーション用のデータを会社のデスクトップからノートパソコンにコピーしてくるのを忘れたのだ。営業先とは逆方向の会社に立ち寄ると遅刻してしまうし、上司は移動中らしく携帯に出てくれない。困った。ともかく会社に電話してみると先輩が早めに出社していた。「どうしよう〜」われながら情けない声で、いきなり泣きついてしまった。

(<http://wgate.ascii24.com/wirelessgate/loadtest/2004/12/04/652943-000.html>)

(14)の例は、頭に血が上った原因は駅で大声を上げてしまったことで、恥ずかしい思いをしただけではなく、大切なプレゼンテーション用の資料を持って来るのを忘れたという失敗を犯したことによる焦りだということが示されている。そしてこの事態に対してどのように対処すべきかの適切な判断が下せず、会社の先輩に電話で泣きついてしまっている。

このように、「頭に血が上る」は、怒り以外のマイナスの感情^{*6}が原因の場合でも用いられる。そして、(13)(14)の例からもわかるように、「焦り」や「恥ずかしさ」も、ある失態(失敗)を犯したことにより、「感情のコントロールがきかなくなることを示している。

しかし、これらの用例は、近年使われるようになった比較的新しい用法ではないかと思われる。それを裏付ける事実として、現行辞書の意味記述が挙げられる。松村編(1995:50)では、「頭に血が上る」の説明として「逆上する。かっとなる。」を用いている。また柴田・山田編(2002:175)では、「頭に血が上る」は「いかる」の類に分類されている。よってもともとは怒りの表現として定着していたことが伺える。そしてそれが現在では、怒り以外の感情にまで原因の範囲が拡大されてきていると考えることができる。さらに、青空文庫においては、「頭に血が上る」が、怒り以外の感情として用いられている例はない(2011年11月末現在)。よって、現在では、怒りから怒り以外のマイナスの感情にまで、範囲が拡大されてきていると考えることができる。以上のことから、怒りとしての「頭に血が上る」と、それ以外のマイナスの感情が原因の場合の「頭に血が上る」は、「怒り」という典型的なマイナスの感情から、「焦り」や「恥ずかしさ」などのより広範囲なマイナスの感情へと一般化されており、この両者の関係はシネクドキー的關係だと言える。

^{*6} 拙論(2000)で、感情はプラスとマイナスの感情に二大別され、怒りは典型的なマイナスの感情であることを示した。そして中村編(1993=1979)、宮地編(1982)を参考に、マイナスの感情を<怒・哀(悲・淋)・怖・恥・厭(鬱・惰・苦・悔・嫌・憎・惑)・昂(苛・昂)・驚>とした(なお、「驚」のようにプラスとマイナスの境界がはっきりしないものもある)。この中に「焦り」や「恥ずかしさ」も含まれる。

2.3. 「頭に来る」*7

「頭に来る」については、田中(2003)、有園(2007)に説明がある。まず田中は「頭に来る」の分析を次のように行っている。

（「頭に来る」の）「来る」は、「疲れが眼に来る・アルコールが足に来る」などの「来る」と同様に、病気などの影響が身体はどこかに顕著に現れることであると理解される。つまり「頭に来る」は、怒りが身体部分としての頭に影響を及ぼすことをもって怒りを表す表現と考えられる。ただ、この表現（「頭に来る」）では、怒りが及ぼす影響の具体的な内容は示されていない。（p.121、括弧内は引用者による補足）

田中は、「疲れ」のように知覚される症状が、身体はどこかに顕著に現れることや、「アルコールのような具体物が身体に及ぼす影響」という意味内容と、「怒りが身体部分としての頭に影響を及ぼすこと」という意味内容とが類似するとしている。しかし本稿では、「頭に来る」が怒り以外の現象を表す用法として存在するのならば、その用法との関連性についても説明すべきだと考える。なぜなら、ある表現形式に異なる複数の意味(用法)が存在するのならば、それらの意味は転用によって生じたものと推測されるからである。また田中が、「頭以外の身体部位語(眼/足)に+来る」と「頭に来る」との類似性を指摘している点も検討の余地がある。田中のように「頭以外の身体部位語」を用いた表現との類似性を分析の出発点にするよりも、「頭に来る」という表現が、怒り以外の意味でも使われているかを検討すべきだと考える。

次に有園(2007)は、「頭に来る」を以下のように分析している。

「頭に来る」は<怒る>ことを表しており、先行研究でも述べられている通り、これは身体内部における血液の上昇に動機付けられていると考えられる。浜編(1982)*8の、人間の怒りに対する生理心理学的研究では、怒りや恐怖や痛みなどといった情緒状態に関して、予期しない突然の強い刺激が、人間の身体に瞬時的に驚愕反応を引き起こすと述べられている。そこでの実験では、人間が怒りや恐怖などを引き起こす強い刺激に出会うと、心臓の拍動は力強くなり、速められ、それによって心臓から博出される血液量は増加し、特にこれは怒りにおいて著しいことが確認されている。<怒り>に関わる表現の「頭に血が上る」や、「血の気が多い」、「血管がぶちぎれるほど怒る」、「顔を真っ赤にして怒る」など

*7 怒りとしての「頭に来る」の出現時期については、竹内(1997=1988)に次のような指摘がある。

「アタマニクル」ということばを、戦後しばらくして、若者たちがしきりに使い出した。あれはいつ頃だったろうか？

私の覚つかない記憶だと一九五〇年代の半ば頃ではないかと思うのだが、芝居の世界に入り立ての頃の私にとって、この語句の感じは一種異様に鋭角的でまことに新鮮であった。

だが私自身は使えなかった。（以下略）(p.28)

また言語事実においても、青空文庫において「頭に来る」が怒りの表現として用いられているものは1件もない(2007年12月現在)。それに対し検索エンジン Google で「頭に来る」を検索すると「怒り」以外の意味として用いられている例を探すのは困難である。このことから怒りとしての「頭に来る」は、戦後使われ始めた比較的新しい用法であると考えられる。

*8 有園(2007)では浜編(1982)となっているが、文献を確認したところ、浜編(1981)であった。よって本稿で引用する際は、浜編(1981)とする。

もこれと同様の観察ができる。つまり、「頭」に「来る」のは血であり、怒りの感情が生じると心臓の拍動とともに心臓から送り出される血液が頭に巡るという身体経験に基づいて、「頭に血が上る」、「頭に来る」などの表現が<怒り>を表すものと考えられる。(p.311、下線は引用者)

以上のように、有菌は、「頭に血が上る」と同様、「頭」に「来る」のは「血」である」と結論づけている。このように、実験結果を分析に取り入れた姿勢は注目に値するが、「頭に来る」は、先に考察した「頭に血が上る」とは異なり、生理変化がそのまま怒りの表現として用いられているわけではない。よって生理現象としての「頭に来る」から、怒りとしての「頭に来る」が理解可能になるには、どのようなプロセスを経ているのかを考察する必要がある。

ではまずはじめに、田中(2003)の問題点から検討する。それは、具体物が身体に及ぼす影響や、知覚される症状が明示されている、「アルコールが足に来る・疲れが眼に来る」の「来る」と、「頭に来る」の「来る」が類似しているという点についてである。まず、「アルコールが足に来る・疲れが眼に来る」との類似性を指摘するのであれば、「具体的な原因+が+頭に来る」の例を挙げるべきであろう。「具体的な原因+が+頭に来る」については以下のような例がある。

(15) 部屋の右手の隅に七宝細工かと思われる贅沢な寝台が在る。金糸でややこしい刺繍の紋章を綾取(あやど)った緋色の帷帳(カーテン)がユラユラと動いたと思うとサッと左右に開いた。その中の翡翠(ひすい)色の羽根布団を押除(おしの)けて一つの驚くべき幻影がムクと起上った。

玉虫色の夜会服を着た妖艶花のような美人……噂に聞いた……プロマイドで見た……銀幕で見た……否。それ以上に若い、匂やかな生き生きした艶麗さ……私は、私の大動脈瘤が描きあらわす一つの幻覚ではないかと思った。コンナ素晴らしい幻影が見えるのは、梅毒が頭に来ているせいじゃないか知らんと思ったくらい蠢惑(こわく)的な姿であった。(http://www.aozora.gr.jp/cards/000096/files/2121_21870.html)

(15)の例は、身体の中にあつた梅毒が頭に到達し、頭(脳)の機能に支障をきたしていることを示している。これは田中の言う「病気などの影響が身体のだこかに頭著に現れること」を「頭に来る」で表している例である。よって、田中の言う「病気などの影響が身体のだこかに頭著に現れること」は、「眼」や「足」ばかりではなく、「頭」に来る例でも存在することがわかる。ただし、梅毒が頭に到達した結果、頭の機能に支障をきたすのは暫時的なことではなく、持続的なことであり、頭の機能が修復不可能だという点が特徴である。また、この「梅毒が頭に来る」という事態と同じ事態を、「梅毒が頭に回る」という別の表現で言い表すこともできる。「頭に回る」とは、「頭全体に影響が及ぶ」ことを示す表現であることから、到達した結果、梅毒が頭(脳)の機能にダメージを与えているという後の事象の方が焦点化されていると考えることができる。

次の例は「ラム酒が頭に来る」という例である。

(16) 顧問の女先生が手製の生チョコを配ってくれて「今すぐ食べて下さい」と言ったので、皆その場で食べたところ、ラム酒が効いた大人味だったらしい。娘が先生に「凄く美味しいです。ラム酒が頭に来ました〜！」と言った所、友達が「頭に来た?」「頭に来たの

～??」と突っ込んだら、先生が「頭にキタんだ、ゴメンなさいっ！」と言ったので、焦った娘は「頭に来たんじゃないなくて、頭に回ったんです！回ったんです！」と必死に伝えたそう。 (<http://blog.livedoor.jp/dynamobunbun/archives/51284758.html>)

(16)の例は、ラム酒が効いたチョコレートを食べたことで、頭がかつとのぼせるような酔いに近い状態になったと推察できるが、それを「頭に来る」で表現している。そして周りの友達やチョコレートをくれた先生が、「頭に来る」を怒りとしての「頭に来る」と勘違いしたので、あわてて「頭(ラム酒が)回った」と言い直している。しかしこの例は、(15)の「梅毒が頭に来る」のように、頭の機能にダメージを与えているというほど、頭に与える影響は強いものではない。またその影響も暫時的なものであり、梅毒のように頭に到達した結果、頭の機能が修復不可能になっていることまでは含意していない。しかし、「ラム酒が頭に回った」と言い換えられていることは、暫時的にせよ頭に何らかのマイナスの影響を及ぼしていることを示していると言える。

以上、生理現象としての「(梅毒・ラム酒が)頭に来る」を見てきた。では、次に怒りとしての「頭に来る」を見てみる。以下に示す(17)(18)の例では、怒りとしての「頭に来る」は「何かが+頭に来る」の形ではなく、「頭に来る」という表現だけで怒りを表している。

(17) 10月11日号の日経ビジネス・エクスプレスで、野村裕知日経ビジネス編集長が「1.5兆円の損失でも続投する不思議」と題して、素朴だが難しい問題を投げかけている。NTTドコモの例を引き出し、日本の大企業経営者は業績不振が続いても、巨額の赤字を出しても引責辞任しないのはなぜかという疑問だ。

もちろん、この問題は経営学的にはコーポレート・ガバナンスや特殊な株主構成などが議論の中心になるであろう。しかし、長銀経営陣の末席に身を置き、また多くの大企業に係わってきた筆者にとっては、つきつめれば「人間」の性(さが)に帰着する問題のように思えてならない。当事者にしか理解できない「辞めたくない理由」、「辞められない理由」があるからだ。

その一つは、「ただの人」になる恐怖である。思い出すのは、トップまで昇りつめたある高級官僚の話だ。彼は、退官後しばらく浪人生活を送っていたが、あるパーティの席上で、筆者に対し真面目な顔で「下界」で出会った「無礼な」所業について語った。

退官後初めて銀行に赴き、預金を引き出そうとカウンターに向かったところATMの利用を勧められた。しかし、使い方がわからず、どうやってもうまく引き出せない。頭に来たので、警備員に身分を明かした上で支店長を呼び出した。

すぐに飛んできた支店長は平身低頭し、カウンターの行員に命じて最優先で処理した。ようやく溜飲を下げて店を出ようとしたところ、その支店長に、「〇〇様、次回からはぜひATMのご利用をお願いします。」といわれて怒りがよみがえったというのだ。

(<http://bizplus.nikkei.co.jp/colm/yanai.cfm?i=20051116nai21c9>)

(18) ある宅配会社の対応について頭に来ています。仮にS社とします。

先日、S社から封筒の宅配便が発送されました。中には再発行の効かないプレミアもののチケットが入っていて公演はまもなくです。そのチケットですが、自宅マンションの1F集合ポストへ無造作に投函されておりました。封筒が大きくポストへ入らないため、

投函したというよりは軽くささっていたという感じです。

ドアポストではなく、集合ポストです。本当に誰でも簡単に持っていってしまうような感じだったので、見つけたときに冷や汗の出る思いでした。一番許せないのは、うちに来た気配が無いということです。留守にしていなかったにも係わらず、訪問はありませんでした。にもかかわらず、宅配便のサインを勝手に偽造して1Fの集合ポストに差していくという行為…頭にきます。(http://q.hatena.ne.jp/1154291296)

(17)の例は、元高級官僚が初めて銀行に行き、カウンターで預金を引き出そうとしたが、ATMを勧められた。この元高級官僚は特別扱いをされることに慣れきっているため、一般の人と同じATMを使うように勧められたこと、さらに機械の使い方がわからず、お金をうまく引き出せないことを指して「頭に来る」を用いている。また(18)の例は、紛失しても再発行してもらえないプレミアムもののチケットを、留守にしていなかったにもかかわらず、集合ポストに投函されたこと、また受け取りのサインを偽造されたことに対して許せない気持ちを「頭に来る」で表している。2例に共通するのは、「自分は特別扱いされるのが当然だ」「プレミアムもののチケットを大切に扱うのは当然だ」という当事者の気持ちに対し、そのような扱いをされなかったことに対する強い怒りである。

怒りとしての「頭に来る」は、有菌(2007)が述べているように、浜編(1981)が「怒りによって心臓から送り出される血の量が増える」という事実を確認しており、その血は頭にも到達していると考えられる。そして通常より多い血の量が頭に到達することによって、頭が何らかの影響を受けていると考えられる。それは実例で示されているように、冷静ではない精神状態という形で現れている。以上のことから、怒りを表す場合でも(「頭から湯気を立てる」や「頭に血が上る」のように外部から観察可能である可能性は高くないが)生理変化は起こっており、「怒りが原因で通常よりも多い量の血が頭に到達し、頭に影響を及ぼすさま」を表していると言える。さらに、「怒り」という感情が原因で血流量が増え、頭に影響を及ぼすということを表しているため、「原因－結果」のメトニミーに動機づけられていると言える^{*9}。

それでは、ここで怒りとしての「頭に来る」が、生理現象としての「頭に来る」からどのようにして理解可能になるのかを考えてみたいと思う。

すでに見たとおり、生理現象としての「頭に来る」は、<梅毒や酒が頭に到達し、(程度の差はあるが)頭にマイナスの影響を及ぼすさま>が焦点化されていた。そして怒りとしての「頭に来る」は、<(怒りが原因で)通常よりも多い量の血が頭に到達し、頭に影響を及ぼすさま>を表していると考えられる。以上のことから、もともとは身体症状を表す「頭に来る」が、怒りを表す「頭に来る」に転用されたと考えることができる。すなわち両者の関係は、生理的に「頭にある物質が到達し、頭に影響を及ぼすさま」と、怒りが原因で「血流量が通常より多く頭に到達し、頭に影響を及ぼすさま」という類似性に基づくメタファー的关系であると言える。

以上、生理現象としての「頭に来る」と、怒りとしての「頭に来る」との関係について見てきた。さらに「頭に来る」には、怒り以外にも「頭に来る」を用いた例がある。まず、(19)の例をご覧いただきたい。

^{*9} 本文中でもすでに述べたが、血流量が増えたこと(すなわち怒りによる生理変化)は、「頭から湯気を立てる」や「頭に血が上る」のように必ずしも外部から観察可能なものではないと思われる。

(19) 沁(し)み沁(じ)みと父の話を聞いてみると、やはり父には父の言分があるので、真向から反対はできないと云ふ気もしたのではあるが、一人になると、これでは母に済まないと云ふ感情が無暗(むやみ)に突き上げて来た。それに、父の話しやうも相談と云ふよりは頭からきめてかゝつたところのあるのが思ひかへされると、自分は現在他家に嫁いでいる身ではあるが、母のゐない後では自分が母の代りのやうなものでもあるのだからもう少しは遠慮と云ふものがあつてもいいし、又遠慮されてもいいほど自分は娘ながらに多少は分別のある年になつてゐるのだ、などと考へられもした。さう思へば話しの嫌な部分ばかりが頭に来て、どんなことがあつてもこれだけは父の言ふなりになつてはならない、と自分で自分に言ひ聞かせた。

それが顔に出たかして、鳥羽は民子を前にしたまゝしばらく苦り切つてゐたが、民子が図にのつて母のことを言ひ出すと、矢庭に厳しい面特になつて「お前なんかは何が解るか」ときめつけた。(http://www.aozora.gr.jp/cards/000273/files/4645_19216.html)

(19)では、「話の嫌な部分」という抽象化されたものが「頭に思い浮かぶ」という意味で、「頭に来る」を用いている。(19)に類似した例をもう一つ見てみよう。

(20) 「それに味を占めて敵討物はその後も二、三物しやした。箱根靈験蹇仇討(れいげんいざりのあだうち)、有田唄(ありたうた)お猿仇討、それから二人禿対仇討(ふたりかむろついのあだうち)、鬼兒島誉仇討(おにこじまほまれのあだうち)、敵討宿六娘、ただいまは力競稚敵討(ちからくらべおさなかたきうち)てえ八巻物を書いておりやす。」

「ほほう、それでは宇田川町にもあえて劣りますまい。お盛んなことで。」

と六樹園は皮肉を含ませて言ったが三馬にはそれが通じたのか通じないのかすまして答えた。

「なに、それほどでもげえせん。」

そのまったく世界の違った三馬のようすを見ているうちに、一つの素晴らしい考えが六樹園の頭に来た。

こんな無学な、文学的教養のない式亭輩が興に乗じて一夜に何十枚となく書き飛ばして、それで当りを取るような敵討物である。それほど大衆の程度が低いのだ。何の用意もなく思いつき一つで造作もなく書けるにきまつている。この三馬などが相当に大きな顔をしているのだから合巻読み物の世界はじつに下らない容易いところだ。今この自分、六樹園石川雅望が、このありあまる国学の蘊蓄(うんちく)を傾けて敵討物を書けばどんなに受けるかしのれない。大衆は低級なものだ。他愛ないものだ。拍手喝采(はくしゅかつさい)するであろう。自分の職場を荒らされて、この三馬などはどんな顔をするだろう。それを見たいものだ。一つ敵討物を書いてやろう。

(http://www.aozora.gr.jp/cards/000290/files/1812_7903.html)

(20)の例は、「具体的な人物」+の+頭に来る」という形で用いられており、<ある考えが頭に至るさま>を表している。「ある考え」とは目に見えない抽象化されたものであり、この点が、(15)や(16)の具体的な「梅毒」や「ラム酒」とは異なっている。しかしながら、(15)や(16)と同様、(19)でも「何が」に当たる部分が、また(20)でも「何が」と「誰の(頭に)」という部分が明示されて

いる。また(19)と(20)の「頭に来る」という事態は「頭に浮かぶ」という表現でも言い表すことができる。「考えが浮かぶ」とは、<何も頭になかったところへまとまった形で意識されるさま>であり、これにはすでに「頭に影響を与える」という意味は残っていない。しかし<ある考えが頭に至りそれが頭の中で位置を占める>という意味では、「結果の残存」という意味合いはまだ残されていると思われる。よって、生理現象としての<頭にある物質が到達し、頭にマイナスの影響を及ぼす>という限定された意味特徴は、(19)と(20)においては、<ある物質>に当たるものの抽象化が進み、<頭へのマイナスの影響>も消失し、<頭の中を占める>という中庸的なものとなっている。つまり、生理現象の例と(19)と(20)の例との関係はシネクドキー的關係になっていると言える^{*10}。では(21)を見てみよう。

(21) 「せんせいですか」

関西訛(なまり)の特長のある呼び方で、彼はちよつと頭を下げた。それはお辞儀といふよりも、何か強談を持ちかけるといった工合の、一種の身構への感じられる強(き)つい調子だった。

「さうです。——どうかなさつたかね」

房一はその時逸(いち)早く、横に寝かされてある男の投げ出した手首に血がかすりついてあるのを、そして寝ながら立ててある片足のズボンの膝のあたりにもどす黒い斑点の沁みてあるのを見てとつた。

「へえ。——わし達は小倉組の者ですが、ちよつと怪我人ができましたよつて、せんせいに御面倒かけに上つたんですが」

口を利くのは半シャツの男だけだった。恐らく四十前後だらうが、前額のひどく禿げ上つた、痩せ身の、鼻下にちよつぱりした髭をつけてある、がそれらを貫いてある表情は何か殺気のある精悍さといったものだつた。口をきく度に、彼の眼は喰ひこむやうに相手を一瞥した。

「小倉組といふと、下の工事場の方ですな」

房一は、これは煩(うるさ)い相手だなと思ひながら、わざとゆつくり構へてみた。実は、さつき裏口から二人を見かけた時に、すでにぴんと感じてみた。こんな風体の連中は河原町には他にない。それに、今しがた川岸で話に出たばかりの所だつたので、房一にはよけい強く頭に来た。

「どれ一つ診ませうかな。——ふうむ、これあどうしたのかね、ハツパでやられたのか」
彼は男の顔を蔽つてある手拭をとりのけながら云つた。

(http://www.aozora.gr.jp/cards/000273/files/3510_18421.html)

(21)の例は、「何が」や「誰の頭に」に当たる部分が明示されず、「頭に来る」という表現だけで<考えが頭に至る>という意味を表している。そして「考え」という明示されたものがないため、この「頭に来る」は、<ある直感が生まれる>という意味合いが濃くなっている。またこの(21)の「頭に来る」は、別の類似した表現との類似性を想起させる。それは「(頭に)ぴんと来る」という表現である。このことは、(21)の「頭に来た」の文のすぐ前には「ぴんと感じてみた」という表現が

^{*10} しかし、この分析については、さらに実例を多く収集し、考察する必要があると考えている。

あることからわかる。「頭にぴんと来る」には「ぴん」というオノマトペが使われており、本稿ではオノマトペにまで言及する用意がないが「(頭に)ぴんと来る」とは<ある感覚が急に生じるさま>である。そして(21)においては、「梅毒やラム酒の例で見たような、「到達したものが頭(脳)に影響を与える」という意味合いはもはや感じられず、(19)や(20)に認められた「結果の残存」も感じられない。よってここでは完全に「到達」の側面が焦点化されている。つまり(19)と(20)の<抽象的なものが頭に到達し頭の中で位置を占める>という意味特徴のうち、<頭の中で位置を占める>という部分は、(21)においては消失し、「到達」のみが焦点化されている。このことから、(21)は(19)と(20)からの焦点移動のメトニミーによって理解可能となっていると言える^{*11}。

【参考文献】

- 有菌智美(2007)「「頭」「胸」「腹」—精神活動の在り処としての身体部位詞—」『日本認知言語学会論文集』第7巻 pp.310-319, 日本認知言語学会.
- 国広哲弥(1982)『意味論の方法』大修館書店.
- 佐藤信夫(1992=1986)『レトリック感覚』講談社学術文庫.
- 柴田 武・山田 進編(2002)『類語大辞典』講談社.
- 瀬戸賢一(1997)「意味のレトリック」『日英語比較選書1 文化と発想とレトリック』(中右実編) pp.94-177, 研究社.
- 竹内敏晴(1997=1988)『ことばとからだの戦後史』ちくま学芸文庫.
- 田中聰子(2003)「心としての身体—慣用表現から見た頭・腹・胸—」『言語文化論集』第24巻第2号, pp.111-124, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科.
- 中村 明編(1993=1976)『感情表現辞典』東京堂出版.
- 西村義樹(2002)「換喩と文法現象」『認知言語学 I 事象構造』(西村義樹編) pp.285-311, 東京大学出版会.
- 馬場典子(2000)「怒りを表す動詞(句)の意味分析」名古屋大学大学院国際言語文化研究科修士論文.
- 馬場典子(2009)「怒りを表す動詞(句)の意味分析」名古屋大学大学院国際言語文化研究科博士学位論文(未公刊).
- 浜 治世編(1981)『現代基礎心理学第8巻—動機・情緒・人格—』東京大学出版会.
- 松村 明編(1995)『大辞林第二版』三省堂.
- 宮地 裕編(1982)『慣用句の意味と用法』明治書院.
- 靱山洋介(1997)「慣用句の体系的分類—隠喩・換喩・提喩に基づく慣用的意味の成立を中心に—」『名古屋大学国語国文学』第80号, pp.29-43.
- 靱山洋介(2002)『認知意味論のしくみ』(町田健編) 研究社.
- 靱山洋介・深田 智(2003)「第3章 意味の拡張」『認知意味論』(松本曜編) p.73-134, 大修館

^{*11} ただし、(19)~(21)の3例は、青空文庫(小説)からの引用である。小説における表現は、作者独自の表現方法が多く見られ、この3例も新奇な例である可能性もある。よって、今後は他の検索エンジンなどを用いて、日常生活において自然に用いられている用例も収集し、再考する必要があると考えている。

書店.

山梨正明(1988)『比喻と理解』 東京大学出版会.

【実例出典】

青空文庫検索ページ(<http://www.jca.apc.org/~earthian/aozora/lsearch.html>)

検索エンジン Google(<http://www.google.ne.jp>)

A Discussion on the Scheme of Meanings for the Verb Phrases containing *Atama* (head) that Signify Anger

Noriko Baba

Part-time Lecturer, Aichi Prefectural University

Abstract

This research article examines the scheme of meanings for the verb phrases containing *atama* (head), a word associated with the body, among all verb phrases that signify anger. The following three verb phrases are taken into account, “*Atama kara yuge o tateru*” (steam comes from the head), “*Atama ni chi ga noboru*” (blood flows up to the head), and “*Atama ni kuru*” (it comes to the head). Each of these verb phrases contains illustrations that signify physical responses. Therefore, a consideration is made based on the understanding that these three verb phrases are interpreted as a semantic transfer from physical responses to emotional responses, in this case, anger.

The verb phrase “*Atama kara yuge o tateru*” is motivated by “a cause-and-effect metonymy” or “a metonymy based on simultaneity.”

The verb phrase “*Atama ni chi ga noboru*” is motivated by “a metonymy of temporal adjacency relationship.” However, as far as it signifies anger which is the cause of physiological change or effect that “blood flows up to the head,” it is “a cause-and-effect metonymy” and it is pointed out that there is a strong causal connection.

The verb phrase “*Atama ni kuru*” is metaphorically-motivated.